

平成30年6月28日現在

機関番号：32646

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12825

研究課題名(和文) 洋楽受容とジャンル形成・分化の軌跡 演奏記録・レコード・楽譜・演奏者の観点から

研究課題名(英文) Procedure of the reception and genre-formation of Western music in Japan: From the viewpoint of performance records, sound recordings, music scores and performers.

研究代表者

武石 みどり (Takeishi, Midori)

東京音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：70192630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：明治～昭和初期における洋楽受容の状況を把握するために、音楽学校、軍楽隊、船の楽団、宝塚交響楽団、大学オーケストラ、および活動写真館における演奏記録をデータ化した。並行して、同時期に出版された楽譜の所収曲、およびSPレコード収録曲をデータ化した。演奏レパートリーの形成と変遷を詳細に分析することが今後の課題である。

文献および現存資料を基に、船の楽士、映画館や劇場の楽士、そして初期交響楽団のメンバーの活動状況を調査した結果、船の楽士を経験した者がその後国内でもリーダーとなって映画館や劇場で活動し、1925年頃から次第に交響楽団とダンスホールへと演奏ジャンルと活動場所が分化していったことが確認できた。

研究成果の概要(英文)：In this study, the performance records in music schools, military bands, ship bands, Takarazuka Symphony Orchestra, university students' orchestras and movie-theater orchestras were converted into data, in order to grasp the situation of Western music reception in the Meiji to early Showa era. Paralleelly, music pieces published at that time or those put on phonograph recordings were listed up to compare with performance records. Closer analysis of the repertory is the task for the next step.

As the result of investigation on musicians' activities, it is sure that the former ship-musicians played a role of leaders in small inland orchestras at theaters or cinema-palaces. The venues of their actiity as well as the genres of music they performed gradually differentiated around 1925 into symphony orchestras (classical music) and bands at dance halls (jazz and popular music).

研究分野：音楽学

キーワード：洋楽受容 レパートリー オーケストラ ダンスホール

1. 研究開始当初の背景

洋楽受容の様相を探るための演奏レパートリー研究は、これまで個別の演奏団体や演奏ジャンルについて行われてきた。その実例として、明治期から昭和初期に至るまでの学生オーケストラの演奏レパートリーをテーマとする井上登喜子氏(東邦音楽大学)の一連の研究(2005~10年)や、軍楽隊の吹奏楽演奏記録(谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラム』(2010年)等が挙げられる。

申請者は、2006~08年の基盤研究(C)「大正期の民間楽団に関する資料研究 楽員とレパートリーを中心に」において、民間楽団における演奏レパートリーを研究対象とし、北太平洋航路の船の楽団、ハタノ・オーケストラ、三越少年音楽隊の演奏曲目と演奏曲順について検討した。その結果、大正期にはジャンル混淆状態での演奏が続き、クラシック、ポピュラー、ジャズ等の音楽ジャンルの枝分かれは昭和期に入ってから進んだという推測に至ったが、活動写真館・劇場・ダンスホールの演奏レパートリー、および音楽学校や学生オーケストラにおける演奏レパートリーのデータを加えての総合的な検討が課題として残った。本研究は、その課題をより幅広い視座で展開することを図るものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、

(1)民間楽団、学生オーケストラ、軍楽隊、船の楽団、浅草オペラ、宝塚少女歌劇等、多様な演奏団体による明治~昭和初期の演奏記録をまとめ、洋楽の演奏レパートリーがどのように変化したかを概観する。

(2)洋楽普及の裏側にSPレコードと楽譜の普及がある点に注目し、国産SPレコードの発売目録、大正期に普及したピース楽譜(セノオ楽譜、ハーモニカ楽譜、マンドリン楽譜、等)の出版記録を収集して、音源と楽譜資料といったメディアの観点から演奏レパートリーの定着・変化について考察する。

(3)(1)で確認した演奏記録に名前の挙がる楽団の演奏者の活動の記録資料を調査し、一人の演奏者がどのようなキャリアを経たのか、また演奏者どうしのつながりの変遷が演奏レパートリーの分化とどのように関係しているのかについて考察する。

の3点である。

3. 研究の方法

(1)音楽学校、大学オーケストラ、劇場(帝国劇場、浅草オペラ、宝塚少女歌劇)、軍楽隊、北太平洋航路の船の楽団、帝国ホテルや

活動写真館等、考えうる限りの多様な機関や場所で演奏された楽曲の膨大な演奏記録をデータベース化して考察の基礎とする。特にこれまで精査されていない活動写真館の週報、ダンス関係の雑誌、および当時活動した音楽家の個人的な記録を新資料として取り上げる。

(2)同時期に発行された国産SPレコードとピース楽譜(単一曲を所収した廉価版楽譜)の出版記録をまとめ、そこに収録された楽曲の傾向を検討する。東京都昭和館および北海道新冠町レ・コード館の所蔵資料目録を参考とし、楽譜については各出版譜に示された既刊楽譜リストや楽器店の商品目録を基に、収録曲をデータ化する。

(3)作曲家や独奏家・独唱家として個人で活動した人ではなく、小オーケストラやバンドといった演奏団体の中で活動した奏者を研究対象として取り上げ、その活動状況を確認し、時代とともにどのような動きがあったのかを明らかにする。主に伝聞・インタビューに基づく先行研究(内田晃一『日本のジャズ史 戦前・戦後』1976年、大森盛太郎『日本の洋楽』第1巻 1986年)の内容を精査することを目指し、前項で挙げた活動写真館の週報やダンス関係の雑誌記事、演奏者の個人的な記録を大幅に援用して、エビデンスに基づく活動記録を集約する。

4. 研究成果

(1)演奏記録のデータ集積

東京音楽学校、日比谷公園軍楽隊、宝塚交響楽団、東京大学をはじめとする大学オーケストラの演奏記録に加えて、早稲田大学演劇博物館と国立近代美術館フィルムセンターが所蔵する映画館の週報を閲覧し、そこで演奏された楽曲を確認した。これらをデータベース化し、相互比較ができるようにするために、作曲家名、作品名の表記の統一作業を進めた。演奏記録が膨大な量に及ぶため、その詳細な比較考察は今後の課題として残された。

(2)SPレコードと出版楽譜収録曲のデータベース化を完了し、(1)のデータベースと相互比較を可能とするために書式を整える作業も完了した。船の楽士が伝え、あるいは外国のSPレコードで紹介された多様な楽曲は、そのまま国内の各所で演奏されたが、楽譜が出版されSPレコードが国内製作されたのは、そのうち特に人々に人気のあった楽曲である。特に大正期において「洋楽」として通用していたこれらの楽曲は、今日の我々が「クラシック」と考えるものとは大幅に異なっているが、気軽に演奏できる小曲が楽譜・録音というメディアにのることで洋楽の普及が進んだことが確認できた。今後は(1)と(2)のデータを比較し、詳細な検討によりレパートリーの推移を

さらに明確にすることが課題である。

(3)映画館週報から、映画館の楽士についての情報を収集することができた。また、昭和初期のダンス関係の雑誌、特にシネマパレス刊行の雑誌『錯覚』を再発見することにより、楽士の組み合わせやオーケストラ運動との関わりについて有力な情報を得ることができた。さらにこれを北太平洋航路の船の楽士の情報と照合した結果、船の楽士を経験した者たちが、リタイア後に国内の映画館や劇場、ダンスホール等で演奏を続け、各分野においてリーダー的な存在となったことが確認できた。その詳細は以下のとおりである。

下表に示した楽士は、1925～1927年に交響楽運動に加わったメンバーのうち、船の楽士を経験した人々である。各人の経歴はさまざまであるが、船の楽士をリタイアしたのち、多くは活動写真館の楽士を務めた。海軍軍楽隊の出身者たちが船の楽士を経験することなく松竹系・日活系の映画伴奏を担当し、邦画のための伴奏音楽を模索するようになったのに対して、船の楽士出身者は洋画専門館でコンサートに準ずる洋楽演奏を行い、日露交驩交響管弦楽演奏会における高度な演奏に触発されて、積極的に交響楽運動に加わったという点で異なる道を歩んだ。

	日露交驩 1925/4	日本交響 楽協会 1926/8	新交響楽 団1927/1
Vn	前田璣	前田璣	前田璣
	波多野鏝 次郎		波多野福 太郎
	船橋孝昌	福田宗吉	福田宗吉
		高桑慶照	高桑慶照
		佐藤顕雄	佐藤顕雄
Va	中村鉦次 郎	中村鉦次郎	中村鉦次 郎
		佐藤友吉	佐藤友吉
		古沢久元	古沢久元
Vc	松原興輔	松原興輔	
	北川嘉納	大熊次郎	大熊次郎
		長汐壽治	長汐壽治
Fl	宮田清蔵	宮田清蔵	宮田清蔵
			高麗貞通
Cl	辻井富造	辻井富造	辻井富造
Fg		黒沢健雄	黒沢健雄
		上田 仁	上田 仁
Tp		斉藤広義	斉藤広義
Hr		上宮 勝	上宮 勝

		丹下吉太郎	丹下吉太郎
Tb	上宮 勝	北川嘉納	北川嘉納
	原田五郎	大津三郎	大津三郎
Perc	大津三郎		
割合	11/39=28%	19/47=40%	20/49=41%

1925年頃を境に、映画館における奏楽の生演奏は次第にトーキーへと置き換えられ、彼らの活動範囲は交響楽団とダンスホールへと枝分かれし、ジャンルの分化が始まる。しかしまだその初期段階であった1925～1927年頃、交響楽運動の中で結成された各楽団において、表に示すとおり、実にメンバーの40%が船の楽士の経験者であったという事実は、日本の洋楽受容と定着の過程の中で船の楽士の渡米・演奏体験が大きな意味をもっていたことを示している。1927年以降、これらのメンバーの一部は交響楽団を辞してダンスホールの楽団へと移り、また交響楽団に籍を置きながらジャズの演奏に積極的に参加する例が見られることから、当時はジャンルの壁が低く、相互の行き来が珍しいことではなかったということも大きな特徴として指摘できる。

洋楽受容史においては、従来、作曲家や独奏家・独唱家の留学・作品・演奏活動に注目が寄せられる傾向が強かったが、上表の人々は、船や映画館やダンスホールという現場で日常的に演奏を続けることにより、日本の洋楽の形成に実質的に貢献した人々として重視すべきである。今後さらに、彼らの活動状況を昭和初期のジャズ・ポピュラー分野の演奏者の動きと結びつけることにより、ジャンルの混淆と分化の実態をより明確にすることが期待できる。

本研究においては特に(3)の観点において大きな成果を挙げることができたため、その内容を国際学会および国内の学会全国大会において口頭発表した。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

武石みどり 「大正～昭和初期の楽士たち 汽船、活動写真館から交響楽団へ」 日本音楽学会第68回全国大会 2017年10月28日 京都教育大学

Takeishi, Midori *Yogaku (Western music) in Taisho-period (1912-1926) in Japan: The role of ship musicians on the North Pacific Ocean route.* International musicological society 2017 Tokyo 2017年3月22日 東京藝術大学

6 . 研究組織

(1)研究代表者

武石 みどり (TAKEISHI MIDORI)

東京音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：70192630